

日野稲門会報

第5号

日野稲門会
事務局

清水方
日野市豊田4-37-12
☎0425-86-7798

賀正

横山大観「霊峰」



早稲田大学蔵

新年のご挨拶

日野稲門会々長 佐藤 正和
日野市在住の校友の皆さん、明けましておめでとございます。

さて、物事を成すに当っては、情熱が必要であり、また能力もなければならぬのです。が、なんとしても『やらなければならぬ、やるのだ』の意気込みが不可欠と思えます。

本年度は、日野稲門会は創立十五年になりました。平成七年度の総会・懇親会は、一つの節目であると思えます。

約十五年前、時あたかも母校早稲田大学百周年という長い年月にならんとする準備の最中でありました。当時新総長にご就任されました清水 司先生の就任祝賀会が、八王子早稲田会主催で、開催されました節、招待されました。その頃日野市に校友会なる団体がなく、八王子早稲田会々長斎藤芳孝氏の熱心なご協力を得て、昭和五十五年、日野稲門会として正式に発足することに決定しました。

現会長の佐藤正和氏は、第二目でございますが、日本滞在は早稲田大学入学から卒業まで(旧制)五年のみで、就職先の日本不動産銀行から直ちに生まれ故郷の中国に転勤になり、その後終戦時に、裸一貫で家族と共に、帰国されました。若き早稲田人佐藤会長は、戦後如何に苦勞されましたか察するに余りがあります。

会長は昨年の六月、順天堂病院に入院され、その後東京通信病院に二回程入退を重

ね、再度精密検査に行かれる予定になっております。一日も早く快復されることお祈りする次第です。

「総会に出席できないときは、全会員のご健康とご幸福を心からお祈りしております、とお伝え下さい。」との事でした。あらためて

会長のお心を推察する次第であります。

代筆副会長(24年・体育) 千田 吉郎

日野と新選組(一)

日野市史編集委員 谷 春雄

映画やテレビでおなじみだが、幕末動乱の期に王城の東京都で、池田屋事件、三條高札事件等に、日頃練磨した剣をもって市中取締りに当り、後年明治新政府を造り高官となった人々の心胆を寒からしめた、新選組の局長近藤勇、副長土方歳三、一番隊長沖田総司、六番隊長井上源三郎等は、いずれも多摩の出身者、又は多摩に関係深い人達で、天然理心流という世上では三流ともいわれる剣術で結ばれた同志であった。

この多摩出身者の故郷であり、とくに新選組の故郷ともいわれる日野の、新選組との結びつきはどのようなものであったか探ってみたい。

宿、高井戸宿、布田五宿、府中宿、ここで多摩川を渡り日野宿から八王子を経て、甲府に至っている。

俗説だが、この甲州街道は、半蔵門が起点で「將軍様の逃げ道」であるともいわれている。もし江戸城が東海道、または東山道方面から攻撃されたときには、將軍を甲府へ移す、そのため甲州街道の周辺は天領、又は旗本領で固め、甲府城は城代を置き空城としていたと伝えられている。

また八王子千人同心塩野適齋が書いた「桑都日記」には、もし西軍が中山道から甲府方面に進攻したおりに、甲府城でこれを防ぎ、甲府を抜かれたら、笹子、小仏の天候で三、四日進攻を止めれば、この間に多摩川に幕軍が布陣、江戸を防衛できると記している。旧幕時代、江戸の下町で将棋を指すおり「大手は日野の万願寺」という言葉が使われたという、この大手とは瀧山城であったという説が一般的だが、多摩川が江戸城の最終防衛線と推測する方が正しいと考えられる。

日野宿と嘉永二年の火事

このような位置にあった日野宿は、戸数二百余戸、近隣の枝郷も含めて戸数四百余戸、上佐藤家、下佐藤家が半月交代で問屋場兼帯名主を勤めていた。

嘉永二年正月十八日、この甲州街道に沿って二軒並んでいた、名主家の近くの農家から

甲州街道と天領

日本橋を起点とする甲州街道は、内藤新

火災が起り、おりからの強い北風で火は燃え広がり、下名主家から上名主家へ燃え移ろうとした。宿内の人々が懸命に消火活動に当たっていたとき、日頃から下名主佐藤彦五郎にうらみを抱いていた男が脇差を抜き、消火に当たっていた彦五郎に切りつけた。彦五郎は危く難を逃れたが、男は彦五郎の祖母を斬り殺し、消火に駆けつけた組頭安右衛門をも殺傷し逃走したが、追手に囲まれ捕えられた。

この事件を機に彦五郎は、宿内の治安を保つため、また自己防衛のため、宿内北原に住んでいた、八王子千人同心石坂弥次右衛門組世話役、井上松五郎、源三郎兄弟が学んでいた天然理心流入門し剣術修行を始めた。

天然理心流と近藤勇

この天然理心流は、遠江出身の近藤内蔵助長裕が鹿島神刀流を収め、鹿島神宮に参籠し、神意を得て創始したと伝えられる、剣術、柔術、気合術を総合した剣法と伝えられるが、江戸ではあまり受け入れられず、内蔵助は、神奈川や八王子在、戸吹方面に出稽古に歩きこれを広めていった。理心流の二代目は戸吹村出身の三助方昌が継ぎ、三代目を小山村（現町田市小山）出身の周助邦武が継いだ。周助は江戸牛込柳町に道場を開いていたが、この頃まであまり剣術の普及していなかった多摩東部方面の、名主や富農を中心とした流を広めていった。

この周助、一生に九人の妻を持ったと伝えられるが子供には恵まれなかった。

後継者の居ない周助が着目したのが、上石原村（現調布市）の宮川久次郎の三男勝太であった。天保五年生れ幼名勝五郎といった。

宮川家は上石原村が、大沢村（現三鷹市）に接するところに在った富農で「辻」と通称され、当主久次郎は大の軍書好きで、三人の男の子には常に三国誌や、源平合戦の話の聞かせていたと伝えられる。

この久次郎の三人の男の子は、嘉永元年揃って近藤周助入門した。後年の近藤勇の勝太が十五才のおりであった。三人兄弟のうちで末の勝太が最も剣術に熱心で、勘の鋭さで胆力があり、周助は父久次郎に申し入れ、嘉永二年十月、勝太を養子にもらいうけ、天然理心流四代目継承者としての剣術修行に専念させている。（次号に続く）

石の上にも三年

六十才を境に三十五年余を勤めた会社を退職、三ヶ月も遊んだら趣味の無い者の悲しさ、毎日が退屈でどうにもならない。以前仲間が出来たら、あれもしたい、これもしたいと思っていたのが、何も思い出さない。

たまたま、縁あって、食品加工メーカーに顧問としてフリータイムで勤めることになった。一度はやってみたい仕事であったので即

OKした。自分で企画したものが製品として売れる喜び、志願して開発担当にしてもらった。これには理由がある。六十過ぎれば誰でも人間個性が有る。従って、自分で好きにやらせてみらうのが何よりである。一年目はあっと言う間に過ぎたが、釣れるものは小魚ばかりで、なかなか大物は上って来ない。

まあ三年はガマンだよと、慰められるが、焦りが出る。今年で足掛け三年、やっぱり来た。大物である。二年にも及んだ代物である。ああやっぱり石の上にも三年かと、一人でニンマリ。

イライラしている時に、山歩きを始めた。大昔、奥多摩、丹沢を一人歩きた事はあるが、いずれにしても昔の事である。資本で出来るだけの本を読み、日曜日には必ず奥多摩を歩く事にした。日曜日にしたのは、同じ様なハイカーが沢山居り事故を起した時には何とかなる、と云う理由である。

日野から見える山々、仕事中に眺められる山、体力は昔の様な訳には行かないが、楽しい日々である。山歩きも二年になると、お仲間（日野稲門会の先輩各位）も出来、ますます楽しい忙しい日々である。

（32年・商）山本 栄道

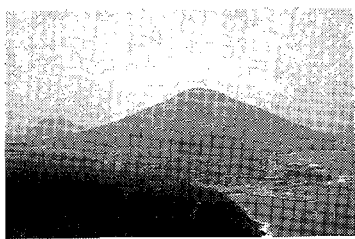
或る日あるところ

阿の火玉畔の湯玉や鍛冶始
成人の日の爆笑にぶつかれり
春耕の足跡使徒のごとくなり
牛の名を考へてゐる目刺かな
仔牛の眼こぼればかり五月来る
杜若鯉が息して通りけり
ことごとく生きて船虫走りけり
羽子板市口上もなく灯りけり
寒雁の過ぎし机上の白紙かな
水中の木々に風吹く神楽笛

（17年・専商）大澤 博

東京の富士

日本の山には、その土地の人々が、形の良
い山に「富士」の名を冠し山名とした「なん
とか富士」を名のる山が数多くある。前から
この「なんとか富士」に関心があったので、機
会をみて登山をこころみている。利尻富士（北
海道・利尻岳）、出



八丈富士（左は八丈小島）

海道・利尻岳）、出雲富士（鳥取県からは伯耆富士、島根県からは出雲富士と呼ばれている。豊後富士（由布岳・大分県）が今まで登った主な山

である。

今年には戦後五十年、いろいろな面で一つの節目にあたるので、東京の富士山（八五四メートル、八丈富士）に登ることにした。

八丈富士は地形図（国土地理院発行）に明確に標記されている。三月初旬、同好の士と八丈島に向う。昔は「鳥も通わぬ八丈島」といわれていたが、東京から三百キロ、空路約四十五分である。当日東京は快晴であったが、

島は雨で目指す八丈富士は山頂が雪で覆われていた。島での降雪は十数年ぶりとのことである。登山を延ばす。翌日は快晴である。麓から眺める山容は典型的なコニーデ型の火山

で、山の表面は殆ど浸蝕を受けておらず、谷もなく優美な裾野を展開している。山頂近くまで登山道は車が入るので登行は容易である。

車を下り階段状のジグザグ道を登る。伐採のため大木は少なく七合目あたりから笹類が多い。程なく残雪が見られた。鞍部から山頂へ

向かう頃から強風に見舞われ、吹き飛ばされないように中腰で身を確保する。太平洋の展望台といわれるように山頂から三原山（大島の三原山と同名、高度七百メートル）、青海原

に屹立する八丈小島、深い藍色の太平洋、点在する集落等が眺められた。鞍部に戻り残雪を踏み火口に下り浅間神社に詣でる。摺鉢状

の火口の斜面は緑の灌木で覆われ、底部に少し水があり不気味な感じである。眺望を満喫

し、樹林を抜けフェニックス、アロエ、ハイビスカスの咲く集落に下山し念願を果たす。

かつて、八丈島は流人の島といわれ、多くの流人が朝な夕なこの山を眺め望郷の念にかけられ、赦免叶わず島の土に帰った悲しい出来事を秘めている。

(19年・独法) 柏倉 修司

サイクリング

八王子市にある会社に来てから十七年間、

雨や雪の日、出張以外は毎日自転車による出勤で一日往復約二十五キロは走っています。

年に数回友達とサイクリングに出かけます。日野から一日の行程は私の脚力で百八十数キロ位が限界で、真鶴半島（三ツ石）、城ケ島、秩父。百キロ位だと鎌倉江ノ島、羽田

空港、檜原村、道志と行先を考えます。また行先はどうしても観光地がからんできません。

今まで行ったサイクリングの中で一番きつかったコースは富士山外周道路（百キロ）でした。日野から車で須走の浅間神社まで運

び、かご坂、山中湖、河口湖、開拓道路経由白糸の滝、サファリパーク、自衛隊演習場と高低差の大きな道を使った時でしたが、二度と走ることはないと思います。

しかし今では一日百キロ位で平らで、道路事情もよく、気楽にサイクリングのできる道路が最適です。羽田へのサイクリングは楽し

い。多摩川沿いのサイクリングロードをひた

走り（途中二子多摩川から二〜三キロは車道）バードウォッチングもよし、河原の景色を楽しむもよし、多摩川河口の大師橋を渡り川崎大師へ参拝するもよし、楽しむサイクリングができます。

日野市を自転車で観光しても見るものが多くあるようです。

ただ残念なことは現在自動車社会の真直中に生きている関係で危険も多く、本当に安全で楽しく走れるサイクリングロードができればと願っています。

(43年・機械) 藤村 重雄

山歩きの楽しみ

滝子山南稜

十一月五日 日野稲門会のメンバー（山本栄道、木村三郎、中西摩可比、同夫人の諸氏と石川）五人と中西さん石川の共通の友人、

中沢、内藤の両氏計七人で滝子山の南稜より山頂をめざす。南稜は「寂愉苑」と云う個人の別荘の主人が開拓し「寂愉尾根」と難しい

名前を命名したところ。朝早い高尾発六時四十四分に乗車し、笹子に七時三十四分に着いた。駅より国道二十号



線を東へ一キロあまり歩き、吉久保集落を抜け大鹿林道を辿る。中央自動車道を越えて大鹿橋を渡ると寂愉苑入口の道標がある。ここが南稜の入口である。車道を登るとほとんどなく寂愉苑と云う個人の別荘に出る。別荘の方が日向ぼっこしていたので挨拶をすると「二組

先に入っている」との事。寂愉苑の横より山道に入ると、間もなく左より巡視路が登ってくる。この道に乗って二十五分ほどちょっとした登りをこなすと、鉄塔で、更に七分で林道に出る。林道は舗装されていて未だ先に続いている。ここは南稜と峰ノ山の鞍部で、南

陵の登り口である。これより急坂である。尾根の両側は雑木で落ち葉を踏んで登るのは快適そのもの。標高九百メートルで紅葉が始まり、急坂と一息つけるちょっとした平な尾根を交えながら高度をとると、尾根も痩せてきて、眼前に真紅のイロハモミジが一際目を魅く美しさで朝日に輝く。ブナ、コナラの黄葉紅葉、鮮かに赤く熟した実を沢山つけた老樹、サラサドウダンのしづい紅葉、何れ劣らずの美しさで登りの苦しさを和らげてくれる。標高千三百メートルあたりから、岩塊の積み重なった急峻の尾根になる。岩のコブを二三ヶ巻き傾斜四十五度位の岩塊を手と足を使って登る。息が切れる。木の根に掴って谷底を見れば、切り立った崖の下部は黄色褐色、たまに朱色の混ざっ

た絨緞、上部はさながら盆栽の石付きの様に
遅しい根張り、そして紅黄葉。素晴らしい構
図。手のそばには渋い色の葉を光らせたイワ
カガミの群落。もうひとふんばりして急斜面
を灌木に掴り乍ら登れば浜立尾根に出る。こ
こから山頂まではのんびり歩いて二十分。全
員の足並みが揃い十二時に山頂に立つ。

下りは渓谷の美しい大鹿川の一般ルートをとる。ザレバは整備されて歩きよく花崗閃緑岩がサクサクとい音をたてる。滑滝は紅葉に囲まれて一段と色気がある。美しい景色に足並みも快調、道証地蔵に十五時。時間もあ
るので笹一酒蔵で日本酒、焼酎の講義をうけながら「グイッ」と一杯二杯、試験でいい気持ちにさせられて焼酎を購入、酒まん(アンコとモロミ)を一袋お土産にして帰途につく。
高尾まではあつと云う間に着き、楽しい一日を過す事が出来た。

幸せなことに日野稲門会の媒介で素晴らしい友人を得て、時々山に入っている。十二月中旬には刈寄山の支脈、舟子尾根から入山尾根に行く予定。体力気力の続く限り山に魅せられた日々が続きそう。
(27年・鉾山) 石川 貞三

パソコンと「トースター」

昨年の11月23日午前0時。秋葉原の電気街をはじめとして日本各地でちょっとした騒ぎ

が起きました。
ご記憶の方も多と思います。そう、「ウインドウズ95」が、日本でも一斉に発売された時刻です。ウインドウズ95とはパソコンの「使いやすいさ」の実現を売り物にした基本ソフトウエアです。

パソコンは必要な専門的知識を持った者が扱える、マニアの「特別な道具」という期間が長く続きました。現在のように職場や家庭でパソコンを使うことが日常となったのも、そんなに古いことではありません。
価格が飛躍的に安くなったこと、基本ソフトをはじめとする各種ソフトウエアが進化してその扱いやすさが増したことによって、いまパソコンの性格も「家電製品」に近いものとなってきました。パソコン売場では、電子レンジやトースターを買うノリでおじさん・おばさん(失礼!)達が、店員に盛んに質問をしていたりします。

パソコンが「トースター」と決定的に違う点はその使用目的を自分自身で決めることです。しかも、ソフトをそろえることにより、趣味をとことん究めたり、家計簿記帳など家事に使用したりなど、その用途は無限に広がっています。つまり、それぞれの好み・考え方で使うことにより「個性」の実現を可能にする「魔法の箱」ともなりえるのです。
そんなパソコンを老若男女を問わず、一人

でも多くの人が自由に、気楽に使いこなすことによって「自分の世界」を築き、いきいきとした、それぞれの生活を満喫していただけることを祈ってやみません。
(56年・商) 青木 仁

平成七年を振り返って

平成七年は、オウム事件があり、また、大震災もあり、たいへんな年でしたが、私個人にとっては、人生を大きく変えた年でした。というのも、平成七年三月に早稲田大学大学院理工学研究科博士課程を終了しまして、無事



学位も得ることができ、平成七年三月から、日本大学理工学部機械工学科に教員として、勤務しております。

授業は主に一、二年生の演習を担当しています。設計製図や機械実験を週に十コマ持つています。その他に、研究室には卒研生と大学院生がいて、研究指導を行っています。研究テーマとしては、流体工学の一分野である管路輸送についてで、一般的な産業分野で言えば、石油、化学、土木建築、工場などで用いられているパイプラインに関するものを研究しています。

日本大学というと、早稲田大学と似ていて、超マンモス大学。パンカラ」というイメージがあり、私としては動きやすい環境に

あります。現に、他の学部はどこにあるのかさえ知りませんし、つまり、必要な時だけ総合大学で、日常は単科大学の様子を示しています。居る学生も、(理工学部に限って言えば)あまりおしゃれとは言えませんし、至って質素です。私も早稲田人としての雰囲気捨てずに、日本大学に溶け込んでいるような気がして、違和感なく充実した毎日を過しています。

来年度からは、日野の地を離れ、千葉県の船橋市の方に転居する予定です。日野稲門会
のますますのご発展を祈っております。
(平成元年・地学) 武居 昌宏

総会・懇親会のお知らせ

- (第一部) 総会
日時 96年2月18日(日)11時30分から
受付は11時から
- 場所 杏花飯店
(JR豊田駅北口京王ファミリーユ3F)
- 会費 7千円(年会費は別に2千円です)
- (第二部) 講演会(12時から)
- 講演 「司法界のよもやま」
講師 日野稲門界顧問 山田裕四先生
(どうぞご期待下さい)
- (第三部) 懇親会(1時から)
- ※なお、95年度の年会費のお振込はお早めにお願ひします (事務局)